

# 震災から 10 年ということ

——非日常の中の日常：1995 年西宮（11）——

原 田 隆 司

Ten Years After the Disaster :

——Ordinary Lives in Extraordinary Situations in Nishinomiya, 1995 (11)——

HARADA Takashi

**Abstract :** This is part of a research project based on our experiences of the Great Hanshin-Awaji Earthquake in 1995. In this paper I have focused on articles from newspapers published between April 2004 and January 2005 in Kobe.

We could identify several different types of articles reporting on the earthquake. First, there are articles reporting memories of the disaster ten years ago. Second, are those reporting on the process of reconstruction of apartments damaged by the earthquake. The third type are those drawing comparisons between the earthquake and many natural disasters which happened in 2004, including those of typhoons and the Chuetsu Earthquake and the Great Earthquake and Tsunami in Indonesia. And finally some other articles, such as one reporting on the birth and death of a child during the period of the earthquake, using an interview with the parents, show us most impressively the fact that ten years have passed.

2005 年 1 月 17 日、兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）の発生から 10 年が経過した。

それは、どのような意味を持つのであろうか、あるいは、どのような意味を持たされたのであろうか。本稿では、2004 年春から 2005 年初めの新聞記事を手がかりにして考えてみたい。

なお、以下では〈 〉に見出しを掲げる。新聞はすべて神戸版からの引用である。

## 1. 時間軸の上で

2004 年 4 月、神戸新聞の朝刊 1 面に次のような連載記事がある。

〈生と死の境 1 沈黙 分かったつもりだった〉

阪神・淡路大震災の話をしたい。あの日から、来年で十年になる。

また震災の話か、という人もいる。まだ言ってい

るのか、という声も聞く。この兵庫でさえそうだ。ほかの土地ではもっと、遠い過去になりつつある。  
(中略)

時の流れが速い。日々、事件や事故で多くの命が奪われる。世界中に戦火がある。震災だけにこだわってられない、といわれるかもしれない。しかし、自分たちの足元で、一瞬にして何千もの未来が断ち切られた災害さえ置き去りにして、私たちは「命の大切さ」など語ることができるのだろうか [神戸、2004 年 4 月 20 日朝刊、1 面]。

その数日前には、〈震災体験談ビデオに〉という記事がある。

あなたの声で、震災の記録を残しませんかー。阪神・淡路大震災の教訓を伝える「人と防災未来センター」(神戸市中央区)は、震災の体験談をビデオ収録し、保存する事業を始める。(中略)収録時間

は一人十分程度。震災被災者やボランティア経験者を対象に、被災当時やこの九年間の体験を語ってもらう。復興へのメッセージも受け付ける。(中略)震災から来年一月で丸十年。同センターは「記憶が薄れる前に、肉声による記録を後世に残したい」としており「多くの人に参加してほしい」と呼びかけている〔神戸、2004 年 4 月 15 日朝刊、24 (兵庫) 面〕。

同じ頃、読売新聞の〈あの日から 阪神大震災 10 年に向けて〉と題する連載記事には、小学校 1 年生の時に神戸市北区で「被災」した高校生の活動が紹介されている。

豊岡に住む高校生が昨年、阪神大震災の七十年前に同市や城崎町を襲った北但大震災について、地元でどれだけの方が記憶しているかを調べようと、たった一人でアンケートを行った。その結果、七十歳未満のほぼ半数が「知らない」と答えた。「ショックでした。押しつける気はないのですが、貴重な教訓を防災に生かさないと、尊い命が失われた意味がなくなってしまう」と訴える〔読売、2004 年 4 月 5 日朝刊、32 (神戸明石地域) 面〕。

この連載の 4 ヶ月後に、再び北但大震災の話題が取り上げられる。

〈探し当てたメロディー 子から子へ北但の惨事歌に託し〉

大正十四年 春五月 二十三日の真昼中 起こる  
起こる 大震災 哀れし北但大震災一。(中略)  
「今井さんが覚えていてくれたから、この歌を子供たちに伝えることができたんですよ」。阪神大震災から十年。歌に記憶を託すのも、私たちにできる一つの方法かもしれない〔読売、2004 年 8 月 2 日朝刊、28 (神戸明石地域) 面〕。

偶然に見つかった歌詞を手がかりにして、正確に歌える 83 歳の今井さんが見つかり、楽譜を完成することができた、という。曲は「勇敢なる水兵」のメロディーとほぼ一致することが分かった。

二月、同〔豊岡〕市気比の市立〇〇小の六年生十六人がこの歌を合唱した。地域学習で北但大震災のことを調べ、聞き取り調査に協力してくれたお年寄

りに、お礼代わりに歌ったという。〇〇〇〇教諭(52)は「子供のころに覚えた歌は大人になっても忘れない。あの子たちも、自分の子供たちに歌ってあげると思います」と話す〔同上〕。

同じ紙面のすぐ隣には、神戸市長田区の「たなばたまつり」の記事がある。

〈復興の願い 短冊 2 万枚に〉

震災時、地元の企業と住民が協力したことを忘れまいと、三年前から開催。会場周辺には「美しい町並みになりますように」「神戸を大切にしたい」などとつづられた約二万枚の短冊が飾られた。(中略)同区苅藻通の〇〇〇〇さん(67)は「久しぶりに心から楽しめた。震災から九年が過ぎ、ようやく気持ちに余裕を持てるようになったということでしょうか」と笑顔を見せていた〔同上〕。

同じ 8 月には、〈震災だけでなく空襲も大水害も神戸市 HP 苦難の姿、一括公開〉の記事がある。

神戸市は、阪神大震災から十年となる来年一月をめどに、震災と神戸空襲、さらに大水害の資料を一体的に整理し、ホームページ (HP) 上で公開することを決めた。六甲山系の迫る神戸は幾度となく水害に見舞われ、空襲で街は焦土と化した。震災後は、その体験も薄れがち。HP では、度重なる災難から何度も立ち上がった神戸の姿を改めて振り返るとともに、教訓を後世に伝え、平和な暮らしや命の大切さを訴えていく〔読売、2004 年 8 月 26 日朝刊、35 (神戸明石地域) 面〕。

この記事によれば、1945 年の 3 月から 6 月の神戸空襲では、約 7 千 5 百人が犠牲となった。また「震災が起きるまで、神戸市民が最も恐れた災害は水害だった」。1938 (昭和 13) 年の「阪神大水害」では、家屋 8 万 9 千戸が被災し、616 人が無くなっている。1967 (昭和 42) 年にも被災家屋 3 万 8 千戸、死者・行方不明者 92 人という水害があった。この HP に大水害の体験を寄せている 83 歳の女性が、次のように紹介されている。

水害により、大正時代に建てられた自宅が五回も床上浸水した経験を持ち、「冷蔵庫の中まで土砂がはいったこともあり、福井の豪雨のニュースを見る

と、思い出して涙が出た。天災はいつ起きてもおかしくなく、備えの大切さを改めて考えて欲しい」と話している [同上]。

80年前の北但大震災、70年前の阪神大水害、60年前の空襲、40年前の水害……発生から10年を迎えようとする地震は、現在から振り返るべきものとして、このような災害と共に時間軸の上に並べられていく。1年後に10年を迎えるということは、他の何ものにもまして、10年が経過したという意味づけにより、過去のさまざまな災害と一緒に並べられることである。「記憶が薄れる前に、肉声による記録を後世に残したい」という考えは、そのことを如実に示している。歳月の経過と人びとの経験。同時進行であったものが、着実に、過去のものに変容していく。

## 2. 現在のこととしての地震

これとは対極のことがある。2004年10月、芦屋で半壊した分譲マンションの再建が決定した。鉄筋コンクリート建ての2棟、全48戸のマンションである。

〈震災の半壊のマンション 手つかず10年 再建へ〉

阪神大震災で全半壊となった兵庫県内の分譲マンション172棟のうち、10年近く手つかずで残っていた6棟中の1棟の建て替え方針が17日、決まった。建設費の負担が難しい高齢者も住み続けられるような計画案を建て替え派が示し、補修派の多くも納得し、ようやく再建に向けて動き出した。(中略) 震災で半壊し、基礎の鉄筋が折れて建物が約20センチ傾いた。建て替え派と補修派が拮抗し、結論が出ないままだった。

動き始めたのは今年3月。母親がかつてこのマンションに住み、近隣の別のマンションの再建をまとめた不動産コンサルタント〇〇〇〇さん(76)が管理組合の依頼を受け、建て替えを前提に復旧対策委員会をつくった。改めて業者に調べてもらい、「住み続けるのは危険」との回答を得て補修派を説得して回った [朝日、2004年10月18日朝刊、34(社会)面]。

当事者にとって地震の直後からの時間は続いている。10年を迎えようとするのが、多少とも、時間の流れに影響を与えているとしても、予め10年を目

途にして進行してきたことではない。地震の瞬間から続く同時進行のできごとである。

もう一つ同時進行として描かれるのは、「ボランティア」たちの「その後」の姿である。2004年5月の暑い日に、東京の情報通信会社の33歳のエンジニアが活動する。

缶ジュースの詰まった段ボール箱を抱え、港区〇〇小学校の校庭を走り回った。「三宅島島民の集い」の手伝いだった。「震災がなかったらここにはいなかった」。初めてのボランティアは95年3月。西宮市立〇〇中で救援物資の仕分けを手伝った。(中略) 寝袋や携帯電話は総務部が備品購入し、「安易な同情は慎む」などの心得を文書にして配った。同社が93年、年12日までの有給休暇を含む「ボランティア活動援助規程」を設けていたのも生きた。(中略) その後は社員個人が有給休暇の範囲で、新潟県での雪かきや都内の公園清掃を続けている [朝日、2004年9月28日朝刊、30(神戸地域)面]。

これは個人の時間の流れであり、10年という区切りは関係しない。ただボランティアとの関わりが10年前にはじまったという点においてのみ関連する。現在の姿は、取材によって、10年後という意味をもたされる。

## 3. 現実の災害が引き出す経験

しかしながら、1. でみたような時間軸上の話題としての地震は、2004年の夏から秋にかけて、現実の災害により、突如として人びとの経験として参照される対象に変容した。それは、先に引用した「福井の豪雨のニュースを見ると思い出して涙が出た」という事態でもある。

これは、10年前であるのかどうかということは基本的には何の意味も持たず、2. で取り上げたのとは、また異なる方向への流れである。

9月7日、次のような記事がある。

〈近畿連続地震 沿岸市町、走る緊張〉

5日夜、2度にわたって近畿地方を襲った地震は、淡路島の津名町で震度4、神戸、西宮、姫路の各市で震度3を記録するなど、県内の広い範囲に揺れをもたらした。震源が東南海・南海地震の想定

震源地に近かったことで、県や関係市町の担当者ならに緊張が走った。阪神大震災から間もなく10年。備えは万全なのか―[朝日、2004年9月7日朝刊、24(神戸地域)面]。

本文中には、神戸市灘区で寿司屋を営む53歳の女性が紹介されている。

震災でダンスの下敷きになりかけた経験があり、それ以来、地震のたびに息が詰まるという。店から家に帰るとすぐに防災用品を詰めたリュックサックを点検した。「備えの大切さを思い出しました」[同上]。

10月には、次のような記事がある。

〈死者・不明 20人超す大災害 台風23号 おびただしい傷跡〉

台風23号の直撃から一夜明けた21日、県内では河川のはんらんや土砂崩れなど多くの被害が次々と明らかになり、阪神大震災以来、最多数の犠牲者18人と行方不明者3人を出す大災害となった。豊岡市では、円山川の堤防が決壊し市街地の9割が水没。300ミリ以上の降雨量を記録した洲本市でも川がはんらんし、おびただしい数の民家が床上・床下浸水の被害を受けた。加えてライフラインの寸断の大打撃。困り果てる市民のために、多くの緊急消防援助隊、ボランティアらが現地に駆け付けた[毎日、2004年10月22日朝刊、23(神戸地域)面]。

翌日の読売新聞夕刊は、1面トップで次のように報じる。

〈阪神大震災・豪雨禍「今度は助ける番」被災地復旧 支援の輪 ボランティア 中高生ら集結 台風23号〉

台風23号で浸水被害を受けた西日本の被災地は二十三日、被害から初めての週末を迎え、各地からのボランティアが集結。濁流が入り込んだ家屋の清掃など、生活支援を中心にした活動を始めた。被災地入りした人らはボランティアセンターで受け付けを済ませ、早速作業に。阪神大震災やナホトカ号重油流出事故などでボランティアに助けられ、「恩返しに」と駆けつけた人もおり、「支援の輪」が広

がりを見せた。読売新聞のまとめでは二十三日午後一時現在、被害は死者七十九人、行方不明者十四人になっている[読売、2004年10月23日夕刊、1面]。

10年目を迎えようとする阪神・淡路大震災と、2004年の現実の災害との重なり合いは、10月23日の夕方に発生した新潟県中越地震により、頂点を迎えることになる。

〈避難者 配給に長い列 新潟中越地震 人、車乏しく物資届かず〉

約九万八千人が避難生活を強いられている新潟県中越地震で、発生から三日目を迎えた二十五日朝、各地の役場や避難所では食料や水が配られた。しかし、配送車両や人手などが足りず、届かない事態も相次いだ。中越地方には二十五日夜、雨が降るとの予報が出ており、二次的な土砂災害の発生も懸念されている。被災者の疲労と不安は募る一方だ[読売、2004年10月25日夕刊、15(社会)面]。

この記事は、食料と水の配付、トイレの不足について現地からの報告をした後で、次のように続く。

阪神大震災では、被災地が大都市の大阪に近く、大量の救援物資が集まった。しかし、幹線道路が寸断され、被災者数も膨大だったことから、運搬、分配は困難を極めた。被災者が必要な物は刻々と変化していたが、ニーズを正確に伝えるのは難しく、報道された避難所にばかり物資が集中し、被災者がいらなかったケースもあった[同上]。

この日の朝刊では「阪神大震災から間もなく十年。その被災者や避難所リーダー、ボランティアらが、『経験がもし役にたつのなら』と、当時気付いた問題点や被災生活の知恵を助言した」という記事もある[読売、2004年10月25日、31(社会)面]。

翌26日には「新潟県中越地震が起き、日本が“自然災害列島”であることを改めて知らしめた。今年は夏以降、集中豪雨、度重なる台風の襲来、火山の噴火に、大地震だ」という記事がでている。ここでは、次のような「今年下半期に起こった主な災害」の一覧をあげつつ、「災害文化」の再構築を呼びかけている。

7月12日～18日 新潟・福島県豪雨水害

7月17日～18日 福井県豪雨水害  
 7月29日～8月2日 台風10号(西日本、東日本太平洋側)  
 8月4日～5日 台風11号(西日本、東海)  
 8月17日～20日 台風15号、大雨水害(四国、東北など)  
 8月27日～31日 台風16号(西日本など)  
 9月1日～ 浅間山噴火  
 9月5日 紀伊半島沖、東海道沖地震  
 9月7日～8日 台風18号(西日本、北海道など)  
 9月26日～30日 台風21号(全国)  
 10月9日～10日 台風22号(東海、関東など)  
 10月19日～21日 台風23号(全国)  
 [読売, 2004年10月26日, 19(くらし家庭)面]

本文中には、『災害文化』の著者である東京経済大学の吉井博明教授による、次のような指摘がある。

戦前までは、「どのような災害の危険があって、どんな備えが必要で、もし起こったら、どう行動するのか」について、地域ごとにある程度のコンセンサスがあった。例えば、度々、津波の被害を受けた三陸地方のある地域の住民は、地震を感じたら、指図されなくても、高台に避難をする。関東大震災で大きな被害を受けた別の地域は、家を建てる時「重い瓦を使わない」というのが常識だ。こうした生活習慣に根付いた対策は、戦後、防災技術の進歩もあって、一部を除いてすたれてしまった。しかし、阪神大震災以降、技術で抑えられるのは中小規模の災害で、大規模災害を防ぐことはできないことが分かってきた[同上]。

この視点は、同時進行の災害について距離をおいて見るものであり、それだけ2004年が災害に見舞われた年であったことを示す。1995年の地震は、再び、歴史的な体験として位置づけられる。

こうした歴史的な次元での比較と共に、阪神・淡路大震災の被災地からの活動も描かれる。次の記事には、神戸青年会議所の活動が紹介されている。

〈支援の恩返し 新潟へ手助け続々「神戸に出来る限りのことする」〉

メンバー6人が26日、同会議所の協賛会社などの協力で集まった救援物資を、4トントラックに積み込んで神戸を出発した。95年の阪神大震災では、新潟を始め全国の青年会議所から多数の救援物資を提供してもらった。同行する次期理事長の〇〇〇〇さん(39)は「次は自分たちが恩返しをする番。震災10周年の区切りを前に、神戸として出来る限りのことをさせてもらう」と話す。今回は、必要な救援物資を新潟の雪国青年会議所に確認し、急ぎよ集めた。

一行は27日早朝にも新潟県十日町市に到着する予定。現地で雪国青年会議所のメンバーに救援物資を引き渡した後、ボランティアとして活動する。

神戸青年会議所は27日早朝、台風23号の被害に見舞われた豊岡市にも、ボランティア約15人を派遣する[朝日, 2004年10月27日朝刊, 32(神戸地域)面]。

現実に即してみると、ボランティアの状況が阪神・淡路大震災の時とは異なるという指摘も出てくる。

〈「阪神」からの提言〉

30日、新潟県中越地震の被災地は、地震から2度目の週末を迎える。95年の阪神大震災では休みに入るたび、支援する学生や社会人らが現地に入り、「ボランティア元年」といわれた。「今回は様相が違う」と、先遣隊を送り込んだ関東や関西のボランティア団体は戸惑いを隠さない。

被災地の約10カ所に活動拠点となるボランティアセンターが設けられている。しかし、大半が人手不足だという。救援物資は続々と届いているのに、避難所などに十分行き渡っていない。道路が寸断され車が使えないところでは、一輪車などで物資を運ぶのに人手はいくらでもいるのにだ。その理由を推測すると、現地に宿泊場所がないことが一つある。地元のボランティアセンターはこのため、「近隣の人」を中心に募集。遠方からくるボランティアには、食料、水、寝袋など持参の「自己完結型支援」を求めている[朝日, 2004年10月30日朝刊, 30(社会)面]。

阪神・淡路大震災から10年目を迎えようとする秋に、現実の災害との対比において10年前の経験が参照される機会が訪れた。それは、10月31日の次のような記事によって、いっそう確実なものとなる。

〈新潟中越地震は震度7 川口町本震 阪神大震災以来〉

新潟県中越地震で、23日午後5時56分の最初の地震(マグニチュード6.8)の際、同県川口町で震度7の揺れを観測していたことが30日わかった。(中略)同地震の最大の揺れはこれまで、小千谷市などの震度6強とされていた。震度7が確認されたのは95年1月の阪神大震災以来。96年以降は震度計で揺れを測る計測震度を使っているが、計測震度で震度7が観測されたのは初めて[朝日、2004年10月31日朝刊、1面]。

読売新聞も1面トップで次のように報じる。

〈新潟中越地震「阪神」以来 震度7 川口町 震度計で初観測〉

気象庁は三十日、新潟県中越地震で、震源地の同県川口町の震度計が、本震発生時の二十三日午後五時五十六分に震度7を観測していたと発表した。これにより、今回の地震の最大震度は、震度の階級で最高の「7」となった。同庁の観測史上、震度7は阪神大震災(一九九五年一月)以来、二回目。阪神大震災では、同庁の被害実態調査の結果などから震度7とされたもので、震度計によって観測されたのは、今回が初めて[読売、2004年10月31日朝刊、1面]。

時間が経過すると、阪神・淡路大震災と新潟中越地震との重なり合いは、より具体的なかたちでみえてくる。

〈仮設住宅でデイケア「孤独死」防げ 新潟県方針「阪神」教訓に設置 中越地震2週間〉

新潟県中越地震の発生から2週間が過ぎた6日、同県は長岡市内に建設中の仮設住宅2カ所に、高齢者が入浴サービスなどを受けられるデイケア施設を併設する方針を明らかにした。仮設住宅でお年寄りの「孤独死」が相次いだ阪神大震災を教訓にしたもので、全国初の試みという。200戸以上の大規模な仮設住宅を対象に設置個所を増やしていく方針だ[朝日、2004年11月7日朝刊、1面]。

2005年11月。阪神・淡路大震災から10年という区切りが2ヶ月後に近づいてくる。

〈神戸市人口 震災前に戻っても… 課題は山積〉

神戸市は九日、十一月一日現在の推計人口が過去最高の百五十二万五千八百一十一人となり、阪神大震災直前(百五十二万三千六百五十五人)を二百十六人上回ったと正式に発表した。ただ、ニュータウン開発が進む西区が震災前の20.3%増となる一方、大きな被害を受けた長田区は80.1%の回復にとどまるなど地域格差は大きい。全国最高水準のオフィスの空室率の改善や、コミュニティの再形成などの課題も山積する中、神戸は震災十年を迎える[読売、2004年11月10日朝刊、31(神戸地域)面]。

〈被災ソース 感謝仕込み 1995セット、1月17日にお届け 神戸の会社 残った分、ブレンド〉

95年の阪神大震災で被災した神戸市内のソース会社が、震災直前に仕込んだソースを使い、「10年仕込みソース」を1995セット販売する。今月初めから予約を受け付けており、震災10年の来年1月17日に届ける。「神戸の被災企業として頑張る姿をアピールし、何よりも支えてくれたお客さんに感謝の気持ちを示したい」との思いからだ[朝日、2004年11月19日夕刊、18(社会)面]。

震災では、兵庫区の本社や工場のうち、数棟が全焼し、被害総額は約10億円にのぼった。

仕込んだばかりの特製ソースが入った5トンの貯蔵タンクは焼け残った。97年、ポートアイランドに会社を移転して再建した際、新しいタンクに移し替えて大切に保管してきた[同上]。

収益は震災遺児のケア施設に寄付をするという。

その隣には、〈震災地から〉という新潟中越地震の連載記事がある。創業150年の酒造会社は9月末から新酒の仕込みをはじめていた。

地震による停電が、〇〇さんを慌てさせた。タンクの冷却装置が止まったからだ。「酒は生き物。発酵でタンクの温度が上がれば、もろみは腐ってしまう」翌日の日中は気が気でなかった。(中略)「来たっ」。10月24日午後7時48分、蔵の電灯がともった。〇〇さんは部屋を飛び出し、冷却装置が順調に動くのを確かめて回った[同上]。

11月23日。新潟中越地震から1カ月が経過した。

被災地では復興に向け、阪神大震災以来の経験を踏まえた取り組みが進む。一方で土砂ダム（天然ダム）の発生、車内で避難生活をしてきた人の死亡など、中越地震は新たな課題を社会に突き付けている[朝日、2004年11月23日朝刊、25（社会）面]。

災害相互援助協定を結んでいた市町村による援助活動や、自衛隊の初動が早く、いずれも効果があったとされる反面で、次のような事態があった。

地滑りなど斜面の崩壊は山古志村を中心に1600カ所以上に上った。阪神大震災では六甲山系で計約770カ所が確認され、深さ1メートル程度の表層崩壊が多かった。国土交通省砂防部によると、中越地震の斜面崩壊は近年では例がないほど多く、規模も大きかった[同上]。

ボランティアの様相の違いも指摘される。

新潟県中越地震でも連日、約1千～3千人が活動している。発生から21日までの延べ人数は、5万人にのぼる。だが、課題は少なくない。

小千谷市がボランティア本部を設置したのは被災5日目。受け入れ準備に手間取ったのが一因だ。被災直後は申し出を断ったこともある。担当者は「マニュアルがなく、ボランティアが大量に来ると大混乱が予想された」と話す。

「地域の壁」も表面化した。

「県内の方」「近隣市町村の方」……。各地のボランティア本部は今、募集に条件をつけている。「特に高齢者は、方言が通じると安心する」と話す担当者もいる。ボランティアの人数に見合うニーズが、被災者から出てこないのも大きな理由だ。

家具が散乱した家を1人で片づけしていた70代の女性は、「ボランティア様にけがはさせられない」と、気をつかった。「自分のことは自分で。よその人にしてもらうのは申し訳ない」。そんな声もあちこちで聞かれた。

地域外の人に警戒する被災者も少なくない。

川口町のボランティアセンターは、ボランティアであることや名前を油性ペンで明記した粘着テープを、服の上から張ることを徹底させている。

「外部からの人の出入りが少ない地域。信頼関係がなく、不安感をもたれやすい」。阪神大震災でも活動したボランティアの男性は、中越地震での活動の難しさをこう口にした[朝日、2004年11月23日朝刊、1面]。

こうして、同じ記事のなかで、2カ月後に近づいた阪神・淡路大震災から10年ということと、10月末に発生した新潟中越地震の報とが、記される。

#### 4. 10年が近づく

現実の災害についての報道と、10年前の経験と、自然災害についての中長期的な視点からの総括。この3つの相互に関連する文脈のなかに、10年目が近づいてくることが入り込んでくる。2004年12月の記事である。

〈震災10年目 独居死58人 兵庫・復興住宅10月まで 5年で316人〉

阪神大震災の被災者が暮らす兵庫県内の災害復興住宅で、独り暮らしで亡くなった人（独居死者）がこの5年間で計316人になったことがわかった。震災10年目の今年に入ってから10月末まで58人にのぼる[朝日、2004年12月2日朝刊、1面]。

〈生き埋め、家族の死、家屋破損 神戸・〇〇中287人調査 幼少期の被災記憶 4割が「今も深く」 結果受け防災授業〉

阪神・淡路大震災で校区が大きな被害を受けた神戸市灘区の市立〇〇中学校で、全校生徒を対象にした「心のケア」アンケートの結果、当時三～五歳だったにもかかわらず、震災に遭った生徒の四割強が、生き埋めや身近な人の死亡、ガラスが割れるなどの「恐ろしかった体験」を今も記憶していることが三日までに分かった。同校ではこのアンケート結果を教材にして、全学級で防災授業に取り組んでいる[神戸、2004年12月4日朝刊、31（社会）面]。

〈私の10年 語り継ぐ 被災地発40人行脚〉

阪神大震災の被災者が全国に出向く神戸市の事業「市民のかけ橋」が、震災10年を前に始まる。心に深い傷を負い、10年前の日々を直視できないで

いた女性教諭は、広島で出会った被爆者に背中を押され、参加を決めた。震災まで仕事一筋で、近所の人の顔も知らなかった会社員や、当時小学生だった大学生……。約40人が手分けして46カ所を訪ね、それぞれの「10年」を伝える〔朝日、2004年12月5日朝刊、34（社会）面〕。

〈復興住宅アンケート 近隣関係依然築けず「よくつきあう」11% 震災前の5分の1〉

阪神・淡路大震災から十年を前に、神戸新聞社と神戸大学の塩崎賢明教授研究室は合同で九月、災害復興公営住宅の入居者にアンケート調査を行った。近所づきあいについて、「よくある」が震災前の56.6%から11.5%に激減。二〇〇一年の調査とほぼ同じ水準にとどまっており、入居から年月をへても近隣関係が十分に築けない姿が浮き彫りになった〔神戸、2004年12月16日朝刊、1面〕。

〈軌跡 県外被災者の10年〉

岡山県山陽町は岡山市の北東に隣接する。同町内の県営山陽団地は一九九五年、いち早く阪神・淡路大震災の被災者を低家賃で受け入れたため、一時は約百五十世帯の県外被災者が住んでいた。

九六年夏。神戸新聞の記者が取材で同団地を訪れると、「今ごろ、何しに来たんや」と高齢の女性から怒りの声をぶつけられた。被災地から遠く離れ、行政情報や支援が届かない中、多くの人が疎外感を募らせていた。（中略）

山陽団地に、神戸に帰りたいたとひたすら願い、公営住宅の抽選に応募し続けている夫婦がいると聞き、取材を申し入れた。だが、「マスコミに言っても事態は何も変わらないから」と固辞された。沖縄県にも神戸の公営住宅入居を希望し続けている被災者がいたが、やはり取材は断られた〔神戸、2004年12月20日朝刊、28（社会）面〕。

〈私たちに震災の記憶はないけれど 歌が被災地つないだ ルミナリエ点灯式 ○○小児童が合唱 イランや新潟に 思い寄り添えた〉

あの歌が、被災地をつないだ。13日に開幕した神戸ルミナリエの点灯式で、神戸市立○○小学校（同市中央区）の6年生たちが今年も清らかな歌声を響かせた。阪神大震災から間もなくまる10年。当時を知る児童が少なくなった今、イランや新潟などの地震を学び、支援することで、被災者の心

に届く歌を引き継ごうとしている〔朝日、2004年12月14日朝刊、32（神戸地域）面〕。

ルミナリエは震災の翌年からはじまった。その第2回目から写真をとり続けているカメラマンは、次のように語る。

今年の点灯式では、みんなが携帯電話のカメラで撮影していた。絵にならなくて困ったけど、十年前のがれきの神戸では想像もつかない、幸せな雰囲気だった。時の流れを感じさせられる光景だ〔神戸、2004年12月22日夕刊、10（社会）面〕

これは、10年という時間の経過を端的に示したコメントである。

〈「震災死」やっとな母の名 阪神・慰霊碑に 娘「無念だったかも」〉

阪神大震災で亡くなった人の名を刻む「慰霊と復興のモニュメント」（神戸市中央区）に18日、行政から「震災死」とは認められていない一人の女性の名が加わる。神戸で被災し、1カ月後に逝った○○さん（当時66）。「地震で死んだのに、証明もないのは無念だったかもしれない」。そう考えた2人の娘が、母の名を刻んだプレートを銘板に掲げる〔朝日、2004年12月18日夕刊、10（社会）面〕。

こうした10年目を直前にした時期でも、現実の災害に関連して、災害についての大局的な記事も掲載される。

〈災害列島の今 18 防災意識〉

「地震なんて人ごとだと…。自分の町で起こるとは思っていなかった」。新潟県中越地震で震度7を記録した川口町の○○助役は振り返る。同町の地域防災計画は、地震を想定していなかった。

阪神・淡路大震災後の一九九五年七月、消防庁は地方自治体が定める地域防災計画に、震災対策を盛り込むよう通知した。何らかの形で盛り込んだ自治体は、兵庫県内の全市町を含め、昨年四月時点で約二千七百。全国で五百近い自治体が一切触れていなかった。

新潟県では九十八市町村のうち、未想定は二十六に上った。県危機管理防災課の○○副参事は「意識



が低くなっていた面は否めない。阪神・淡路が遠い所の話という気持ちがあったのでは」と自省を込める。

二〇〇二年の政府世論調査によると、阪神・淡路から時間がたつにつれ、懐中電灯や食料、水を備蓄している人の割合は着実に低下している。防災白書の〇三年版は、「風化の兆し」と記した〔神戸、2004年12月12日朝刊、1面〕。

こうして、2004年が幕を下ろそうとしていた。

## 5. スマトラ島沖地震

2004年12月26日、スマトラ島沖地震が発生する。

〈「恩返し」救援始動 被災地から輪広がる〉

スマトラ島沖地震の被災者のために、阪神大震災の被災地・神戸から「恩返しに」と支援の輪が広がり始めた。日本の非政府組織（NGO）や在日外国人グループも、現地へのスタッフ派遣や支援物資の配布準備に追われている〔朝日、2004年12月28日、26（社会）面〕。

12月28日の神戸新聞の夕刊1面には、〈上越新幹線 全面復旧 66日ぶり〉の記事の上に、〈インド洋大津波 9邦人の死亡確認 タイ、スリランカで〉〈死者2万4千、不明5千人 4万人超す恐れ〉という記事が並ぶ。

さらに翌29日の朝刊には、次の記事がある。

〈まさか…友人絶句 インド洋大津波 震災遭い復興に尽力 神戸在住〇〇さん「町に元気」道半ば〉

スマトラ沖地震で犠牲になった神戸市東灘区在住の〇〇さん（46）は震災復興に尽力してきたアイデアマン。ビジネスで訪れたスリランカで帰らぬ人となった。阪神・淡路大震災から間もなく丸十年、「被災地に元気を」と奔走してきただけに、友人や関係者は「まさか…」と絶句した。（中略）「自分は震災で助かって生かされている。だから、将来を担う子どもたちのために何かしなければ」と常々話していた。「神戸を活性化したい」との思いも強かった〔神戸、2004年12月29日朝刊、23（社会）面〕。

印刷関係の仕事をしていて、市と地元企業が構成する組織のメンバーとして、「神戸と外国の小学校をインターネットで結ぶテレビ会議事業を発案。神戸の子どもが描いた絵を世界に紹介するなど復興・防災情報の発信に努めた」〔同上〕人物である。

2005年1月になっても報道は続く。〈邦人300人 お安否不明 インド洋大津波 犠牲者14万4000人超す〉〔朝日、2005年1月5日、1面〕。

そして、この災害は、阪神・淡路大震災と、国際会議のなかで重なりあうことになる。

〈インド洋津波で 神戸防災会議に熱視線 閣僚派遣の参加国倍増〉

スマトラ沖大地震と津波で18万人を超える死者・行方不明者が出るなか、神戸市で18～22日に開かれる「国連防災世界会議」が、世界レベルでにわかに注目を集めている。今年に入って小泉首相の出席も決まり、代表団に閣僚級を派遣する参加国も倍近くに増加。国連の担当事務所や政府、兵庫県の担当者は対応に追われている。同会議は、今後10年の国際的な防災協力の指針を「兵庫戦略」（仮称）としてまとめる予定だ〔朝日、2005年1月14日夕刊、1面〕。

防災会議の記事には、次のようなものもある。

〈復興かばん 150カ国おそろい 国連防災会議〉

神戸市で開催中の国連防災会議。約150カ国からの参加者は、みんなおそろいのかばんを持っている。「豊岡かばん」だ。同会議では、兵庫県豊岡市の業者がつくった会議用かばんが参加者へのプレゼントだった。かばんが地場産業の同市は昨秋、台風23号で全世帯の約4割が浸水するなど水害に苦しんだ。だが、業者は被災を乗り越え、注文通りの2200個を無事納入。「これこそが復興の証しと頑張った」と胸を張る〔朝日、2005年1月21日朝刊、30（社会）面〕。

そして会議そのものが、次の総括に示されているように、スマトラ島沖地震を中心とするものになった。

〈「防災は国の責任」強調 国連会議閉会「行動枠組」採択〉

阪神大震災から10年を迎えた神戸市で開催されていた第2回国連防災世界会議は22日午前、

最終の全体会を開いた。防災に関する今後10年間の指針といえる「兵庫行動枠組」と、努力を誓う「兵庫宣言」を採択し、午後に閉会した。会議直前に起きたスマトラ島沖大地震・津波は20万人を超える犠牲者を出し、「防災」が世界的な緊急課題であることが改めて認識された。会議で、インド洋の津波早期警戒システムを国連の調整の下でつくることとした声明もまとめられた。各国には、指針に沿った着実な実行が求められる〔朝日、2005年1月22日夕刊、1面〕。

翌23日の朝刊には、次のような続報がある。

阪神・淡路大震災から10年の年に、被災地・神戸で開かれた国連防災世界会議。5日間の日程を終えた22日も、海外からの参加者は街に出た。「防災のまち」としてよみがえった市街地を歩き、震災を体験したボランティアの市民とも声を交わした。「KOBE」からそれぞれの国に持ち帰る「おみやげ」は何だろうか〔朝日、2005年1月23日朝刊、31(社会)面〕。

1月25日には、次のような記事がある。

〈スマトラ地震 あす1カ月 被災地で懸命の救援 日本医療、命つなく 感染症拡大と闘う〉  
スマトラ沖大地震から26日で1カ月。震源に近く、地震と津波で大きな被害を受けたスマトラ島北部のナングロアチェ州では今も、40万人以上の人がテント等で避難生活を送っている。破傷風などの感染症に苦しむ住民たちへの救援活動に、日本から派遣された医療チームが貢献している〔朝日、2005年1月25日朝刊、1面〕。

## 6. 震災から10年ということ

10年目を迎えた阪神・淡路大震災は、こうして、次々と発生した現実の災害に関連させて取り上げられ、対比されてきた。

次のような記事には、そのことが象徴されている。

〈復興・防災 世界に発信 阪神大震災から10年 追悼式典 教訓伝承誓う〉  
六千四百人余の死者を出した阪神大震災から十七日で丸十年を迎えた。大都市を直撃した戦後最悪の

被害をもたらした巨大災害に、十六兆円を超す復興関連の支出をしたものの、兵庫県の掲げた「創造的復興」への道のりは半ば。ただ、新潟県中越地震やスマトラ島沖地震などの災害が相次ぐ中、神戸が蓄積した復興や防災の経験を、海外に呼び掛ける大きな節目の日ともなった〔日経、2005年1月17日夕刊、1面〕。

〈復興文化「地域」を軸に 繰り返す災害に備え〉

「震災はまだまだ終わらない」。阪神大震災から十年たって改めてそう思う。表向き震災のつめ跡が見えなくなる一方で、復興住宅での孤独死は後を絶たない。加えて十年の節目を待つかのように新潟県中越地震、スマトラ島沖地震である。

大きな節目で阪神大震災の提起する問題を考えると、思いは関東大震災に行く。七十年以上の時を隔てながら、そこに宿縁と違いが横たわるからだ。歴史は繰り返すと行ったらいいのか〔同上〕。

しかし、1月17日が近づくと、10年目の現実に関する記事もみえる。

〈西宮・復興住宅 孤独死1年8カ月も 家賃滞納明け渡し 強制執行時に発見〉

阪神大震災の被災者らが住む兵庫県西宮市の災害復興住宅で昨年11月、独り暮らしの男性の白骨化した遺体が発見された。死亡したと推定されるのは03年3月。発見まで1年8カ月がたっていた。死亡推定時63歳。男性は家賃を滞納しており、明け渡しの強制執行に訪れた同県住宅供給公社の職員が見つけた。震災から10年、男性の死は復興住宅の運営と「孤独死」の防止に新たな課題を突きつけている〔朝日、2005年1月14日朝刊、35(社会)面〕。

朝日新聞は、震災10年となる17日朝刊で、世論調査の結果を紹介している。

一番恐れている自然災害として8割以上があげた「地震」。阪神大震災のような大地震が自分の住んでいるところで起きる不安を「感じている」も69%にのぼる。震度5以上の地震の経験がある層では「不安」は77%に跳ね上がる〔朝日、2005年1月17日朝刊、23(特集)面〕。

回答者の84%が「一番恐れている自然災害」として「地震」をあげ、他は「台風」7%、「集中豪雨」3%、「落雷」「地滑り、山崩れ」「火山の噴火」がそれぞれ1%、「竜巻」「津波」「雪害」は0%である（小数点以下四捨五入）。そして、次のような結果もある。

災害観を四つの選択肢から選んでもらうと、「いくら準備しても災害はさけられない」が50%で最多。「常に備えておけば安心」は36%、「忙しくて考えるひまがない」も7%あった。地域や地震経験の有無よりも、むしろ年代による違いが目立つ。「災害はさけられない」は20代から50代で5割以上を占め、特に30代で60%と高め。一方、「備えれば安心」は20代では26%だが、年代が上がるほど増え、70歳以上では、49%を占める。「忙しくて考えるひまがない」は20代で14%と多かった[同上]。

この記事は、あの地震を最も大局的にとらえたものであるといえるだろう。そうした記事が掲載されるということが、10年という時間を示している。

同時に、1面では、〈共に祈り、生きる 阪神大震災 きょう10年〉という見出しと、追悼のロウソクの写真の下に〈経験糧に津波救援 大阪の消防隊長「一人でも多く」〉という見出しの記事が掲載されている。

インド洋大津波で壊滅的な被害を受けたタイ南部の被災地で、大阪市消防局の航空隊長〇〇さん(58)が活躍している。国際緊急援助隊ヘリコプター部隊の一員。阪神大震災の時も、神戸上空を飛び回った。「一人でも多く救いたい」との思いは、今も同じだ。(中略) 昨年の大晦日にブーケット入りして以来、救援物資を運ぶ日々だ。(中略) 95年1月17日。〇〇さんは大阪市消防局の副隊長だった。患者の緊急搬送の要請を受け、大阪・八尾空港から兵庫県西宮市へ向かった。グラウンドに着陸するため100メートルまで高度を下げると、家々の屋根瓦が崩れ落ち、茶色い土が露出していた。言葉を失った。(中略) 〇〇さんは地震発生から約60日の間に、103回、計41時間55分飛んだ。22人の患者と医師16人、看護師21人ら計67人、医薬品や血清、食糧など物資計8トン運んだ。(中略) 数年前、震災の日に搬送した女

性がリハビリを終えて元気になったという新聞記事を読んだ。「いつだって時間と戦いながら空を飛び続けてきた。助ける人たちが神戸の被災者から世界の被災地の人々に変わっても、仕事の原点はあの震災の日にあるんですよ。〇〇さんはそう力を込めた[朝日、2005年1月17日朝刊、1面]。

前年2004年の4月から2005年1月の新聞記事を散見する限りでは、10年という意味よりも、震度7の大地震という災害そのものの意味と人びとの対応とが、つまりはその体験の中身が具体的に引き出されている。

それは、2004年に日本の内外でさまざまな自然災害が相次いで生じたからである。おそらく前もって構想されていた特集や、実際に取材された題材も、記事にされずに終わったのかもしれない。それほどにまで、2004年の後半から2005年にかけて、日本とアジアでは自然災害に遭遇することになったのである。

そうした現実には、阪神・淡路大震災の体験や経験を引き出すことにもなったのであるが、結果として、「震災10年」という時間の流れを静かにとらえる機会を減少させたのかもしれない。

しかし、同時に、次のような記事は、区切りとして10年目を静かにとらえることが容易でないことを語っている。

〈もがき 答え出す途上「復興とは」1〉

「十年、十年」とざわつく被災地で、遺族らと出会うたび、「復興とは」という問いにぶちあたった。子ども二人を失い、「孫の顔が見たい。かなわないことだけど」と言った父親。妻と子の名がある慰霊碑を訪ねた後、「そっちに行ってもいいか、と聞いたんだ」とつぶやいた人。「風化」という言葉。「あり得ない。みんな胸の中にしまっているだけ」と、少し憮然とした人[神戸、2005年1月1日朝刊、1面]。

震災から10年ということは、10年前に発生したこととして振り返ることであり、自然災害として再考することであり、2004年から2005年という現在のことでもある。純粋なかたちで「震災から10年」があるのではない。

時間の経過は、ひとつのことを多面的なものにしていく意味をもっている。「風化」とは、少し肯定的な

意味としては、多面化ということになろう。ただし、元々「ひとつのこと」であったのだろうか、とも思われるのである。

そうした思いを一層強くする記事がある。2005年1月4日から12日まで、6回にわたって神戸新聞の夕刊に掲載された「季節の環-45日の生涯」という記事である。

三宮の東遊園地にある「慰霊と復興のモニュメント」で目に止まった、震災直前の1995年1月11日に生まれ、2月24日に亡くなった女の子の物語。「小さな命を書きとどめたいという気持ちが募った」記者が、数ヶ月、両親の元に通いつめて書いたものである。各回とも800字に満たない長さである。

94年11月、8カ月の検診で訪れた西宮の病院で、胸に水がたまっていることが分かる。1月11日の午前零時過ぎ、予定日より1カ月早く産声を上げた。その時のことを、母親は語る。

死産かもしれないと言われていたので、産声が上がってびっくりしました。分娩室にはほかにも妊婦さんがいたから、よその子かと思ったほどでした。この子も頑張っている。私も頑張らないと、と思いました」〔神戸、2005年1月6日夕刊、8面〕

体重は2366グラムであった。父親が語る。

廊下において、すぐに集中治療室に運び込まれる保育器を見送りました。翌朝、西宮市役所が開くと同時に出生届けを出しました。長く生きられないかもしれないから一刻も早く出したかった。受付で「おめでとうございます」と言われ、ちょっと複雑な気持ちでした〔同上〕。

その後、病状はよくなり、本格的な治療に入るはずだった。しかし1月17日に容体は急変する。母親は、その日が退院の予定日だった。大きな揺れの後、部屋の外から看護師の「悲鳴に近い声」が聞こえてくる。娘のことが気になって廊下に出るが、泣き顔の看

護師さんに戻るように言われる。

人工呼吸器が一時停止し、病院は手動で対応するが、「地震のショックで腎臓機能が低下、容体は日に日に悪化した」。

震災の後の混乱の中、私たちは神戸の自宅から何時間もかけて、西宮の病院に通いました。保育器の外から見守るだけでしたが、ひと目でも〇〇〇の顔を見たいと思っていました〔神戸、2005年1月7日夕刊、10面〕。

そして2月24日。血圧が極端に下がる。心臓マッサージを父親が断った。母親が語る。

体につながっていた何本もの医療チューブが外され、抱かせてもらいました。〇〇〇が生まれてから初めて、この手で抱きました。五分ももたなかったと思います。私の腕の中で〇〇〇は最期を迎えました。(中略)

初めてベビードレスを着せてもらって、ほんのり化粧をしてもらいました。とっっても、かわいらしかった。あの顔を覚えているから、遺影がなくても大丈夫なんです〔神戸、2005年1月11日夕刊、8面〕。

連載の最後である6回目には、次のように記されている。

震災から十年を迎える。「この十年を振り返ってどう思いますか」と尋ねた。〇〇さん〔父親〕は少し考え、「あの日があったからこそ、今の私たちがあるのです」と答えた〔神戸、2005年1月12日夕刊、10面〕。

地震の発生に沿うかのような、ひとつの命の始まりと終わり。決して劇的ではない、こうした記事のほうだが、「被災地」で地震を経験した人間からすれば、「震災10年」というものを語り、そして「震災」そのものを語ると思われるのである。(2005.12.29 未完)